

妻の敦子さんが亡くなってから、井上さんは以前よりはおしゃべりになった。

他の人と話すのではない。

奥さんの写真に向かって、今日一日のことを話している。

敦子さんの生前、井上さんはもっぱら聞き役だった。

今頃、敦子さんは、夫の変わりように驚いていることだろう。

帰宅すると、井上さんは手を洗う前に、まずは小さな仏壇に向かう。

仏壇に向かって手を合わせるが、その時は「ただいま」としか言わない。

簡単な食事を終えると、井上さんは台所もテーブルもきれいにする。

それから、ホットウイスキーを一杯だけ作る。

「今日、面白いことがあったんだよ」

ちびりちびりと飲みながら、テーブルに置いている黒い手帳を開く。

そこには、かなり若い敦子さんが笑ってこちらを見ている。

新品同様だが古い手帳に、井上さんは敦子さんの

写真をはさんでいる。

ウイスキーを飲みながら、数枚の写真のうちのどれかの敦子さんに話しかける。

敦子さんは写されるのを好まなかったから、写真は少なかった。

若い敦子さんを選んだわけではないのだが、敦子さんだけを撮った写真は、やはり結婚当時のものが多かった。

何となく敦子さんに怒られるような気がして、井上さんは葬式の時に使った写真も手帳にはさんでおいた。

しかし、この敦子さんに話しかけることはほとんどない。

きれいに撮れているのだが、今日一日にあったことを話しかけるのは、何となく気づまりだった。

敦子さんが事前に選んだ写真は、中年の頃の写真としては最高に美人に撮れた一枚だった。

法事の時の集合写真だ。

「喪服だから、地味でいいんじゃない？真面目に撮れているし」と元気だった敦子さんは、葬儀の写真にまでTPOを配慮した。

葬式に来るやつが喪服を着るんじゃないのか、と井上さんは疑問に思ったのだが、聞き役としては、黙っているに越したことはない。

井上さんが否定しようが肯定しようが、敦子さんは、自説を変える時はすぐに変えるのだ。いい加減と言えばそうなのだが、そこがまた、井上さんが敦子さんを好きなのところでもあった。

ホットウイスキーのつまみは、一個ずつ銀紙にくるんであるプロセスチーズだ。

井上さんは、チーズを深く噛み切り、チーズに残る歯型を眺めた。

「真似してみた」

敦子さんに向かってそう言う。

写真の敦子さんは笑っている。

以前は、敦子さんのその癖を井上さんが笑ったものだった。

「全くねずみみたいだ」

「だって、友だちからねずみっていわれてたんだもの」

チーズが好きなのかいな、前歯が大きいせいなのか、どっちだったのだろう。

「ずいぶん太ったねずみだな」

「結婚前は痩せてたのよ」

ふくよかな敦子さんが、井上さんは好きだった。

「ふくよかっぺいい言葉ね」

敦子さんは喜んだ。

「服がよかね、いいねってことだよ」

敦子さんは自分で服を作る。

だから、このセリフも喜んでくれた。

もう少し一緒にいてくれると思っていたのだが、胸が痛いと病院に行き、大動脈瘤破裂と診断され、数時間後に亡くなった。

中年後期とはいえ、まだ若かった。

「ずるい奴だよ、お前は」

井上さんは、敦子さんにだけ愚痴を言う。

今年で九年になる。

敦子さんだけがふくよかな中年のまままで、井上さんは初老になった。

井上さんはホットウイスキーをすすする。

「今日な、面白い人がいたんだよ。

笑わせてくれてな。

でも、あの場面で笑うわけにもいかず、本当に困っちゃったよ」

井上さんは、都市銀行支店に併設されているATMで、警備の真似ごとのような仕事をしている。

敦子さんが亡くなって2年後に、長く勤めた職場を定年退職した。

一年ほどは、無駄遣いをせず、質素に暮らしてみたい。

家事は、どうにかこなせるように努力をしたから困らない。

しかし、敦子さんのいない家にひとり過ごすのは、思っていた以上に辛かった。

少しでも給料が入るのは有難いが、なにより、朝から夕方まで気を紛らわせていられるのが助かった。しかし、いいことばかりあるはずがない。

今の仕事は、仕事先からも客からも、理由なく怒られる。

順番の列が長いと、客はいらいらしってくる。

そんな時に限って、ATMの機械に利用中止のサインが出る。

機械になり代わり、人間の井上さんが謝る。

ATMのそばにはぼんやり立っているように見えるが、案外忙しい。

難しい質問をする人もいる。

「いったいどのくらい時間かかるの？」と聞かれても、正解はない。

通帳を何冊も持って、記帳を続ける人もいる。

振り込みを何度も間違える人もいる。

井上さんが口ごもっていると、相手は馬鹿にした顔をする。

「申し訳ございません。少々お待ち下さいませ」と質問に直接答ええないのが一番無難だと、井上さん

もようやくやくわかってきた。

同僚ができたと思っても、辞める人が多かった。

注意を受ける日が続くと、井上さんも辛くなる。

しかし、怒られようがなんだろうが、まだ自分の

そばに誰かいてくれるのだと思えば、我慢できた。

敦子さんに話す出来事が毎日必ずあるという意味では、いい仕事場だった。

その日も朝からクレーム続きだった。

午後になると、ATMに並ぶ人はますます多くなつた。

「おい、君」

井上さんはすぐに、声の主に近づいた。

八十前後の老人だ。

井上さんよりずっと年寄りだが、身なりもよく、恰幅もいい。

はたから見れば、井上さんのほうが年取って見えるかもしれない。

老人はポケットから小さなカードを取り出し、井上さんに押し付けた。

「ハンコ、押してもらっておいてくれ」

車で来店のお客様は、窓口でこのカードを渡すと、スタンプを押してくれる。

指定の駐車場を利用すると、二百円の駐車料金が

百円になる。

しかし、窓口利用者のみの特典だった。

このシステムを知らず、井上さんは失敗をしたことがある。

「お客様、申し訳ございません。これは窓口利用のお客様のみの特典でございまして」

そう言い終らないうちに、老人はうるさそうに井上さんの言葉を遮った。

「そんなことはどうでもいい。上田と言ったらわかるから」

老人にそう言われても、職務上、井上さんはATMのそばから離れることはできない。

以前、お客様のために窓口まで行き、感謝されたものの、あとで叱責されたのだ。

「あの、お客様、申し訳ございませんが」

「もういい、君じゃ話にならん」

老人の声は大きい。

列に並んでいる人たちが、井上さんを見ている。

窓口近くにいた女性行員が気付いたらしく、小走りで行って来た。

「申し訳ございません」

「君ね、私は上田と言うもんだよ。支店長の坂口君はいるのかね」

誘導係の女性は

「誠に失礼いたしました」

と何度もお辞儀をしている。

老人はいらいらした素振りで

「これ、押してきてくれ。こいつじゃ話にならん」

と言うと、井上さんに向かって手を振り、あっちへいけというような仕草をした。

こいつとは私のことか、と心の中でため息をつき、井上さんは老人より一步後ろに立った。

女性はカードをおしただくようにして、走って窓口に行く。

暫くして戻ってくると、老人にカードを手渡して、またへへことお辞儀をした。

今日もまた注意を受けるのか、と井上さんは列に並ぶ人たちを眺め、本来の業務に戻るために、頭を切り替えようとした。

すると、老人の後ろに立っていたサラリーマン風の男が、井上さんに一步近づき、体を少し寄せると低い声で言った。

「このくらいのことをしないとね、金って貯まらないもんなんだよ」

思わず笑い声が出そうになり、井上さんは慌てた。

声を出さず、口を開けずに笑うのは、難しい。

腹に力をいれ、神妙な顔をしようと努力したせい

か、心の中に入りこみそうになった屈辱感はどこかに消えてしまった。

男を改めて見ると、サラリーマン風の、真面目な背広姿だが、井上さんをじっと見ている様子は、ただものではない。

口元が少しだけ笑っているが、ゆがめているだけのようにも見える。

男はすぐに姿勢を戻した。

誰も聞えなかったに違いない。

それなのに、つい、井上さんはきよろきよろとあたりを見回してしまった。

しかし、男は意図してか、前の老人にだけは聞えるくらいの声量調節をしたようだった。

上田という老人が、おっとした顔で振り向いた。

その瞬間、後ろの男が眼光鋭く睨み返した。

井上さんはあっけにとられて二人を見ていた。

目の前で、すばやく剣が舞い、男が老人を一瞬で切り殺したかのように、井上さんには思えた。

老人は男の視線を受けた途端、さきほどの横柄さはどこに消えたのか、慌てて前を向いた。

急に体を揺らし始める。

金持ちが貧乏ゆすりをしていると思うと、井上さんはまた笑いたくなくなった。

今度は上手にこらえた。

都合のいいことに、すぐに老人の番が回って来た。

逃げるように、急ぎ足で老人は空いたATMへと近づいていく。

もう一度井上さんは男を見たが、男はもう、書類カバンを手に、澄まして立っている。

手品を見たかのようにだった。

井上さんはふうっと息を吐いた。

それから終業までの数時間、井上さんは何だかぼんやりした気分で、どうにか仕事を終えたのだった。

「笑わせて切るなんて、時代劇にもないよな」

井上さんは敦子さんに語りかける。

「そう言えば、お前もよく笑っていたよな」

若い敦子さんを見つめながら、井上さんはホットウイスキーの最後の数滴をすすった。

台所に行き、コップを丁寧に洗う。

歯磨きをすませ、パジャマに着替えると、仏壇にもう一度向かった。

葬式の時に使った、笑っていない、きれいな敦子さんの写真をじっと見た。

「忘れていたよ。」

笑って、あげくに俺を切って行ってしまったのはお前だよ。

あの男、お前の弟だったのかもな。  
あっちゃん、おやすみ」